

## 施設キュウリの品質向上に関する研究

(第1報) 収量構成ならびに形状・品質について

田中幸孝・高尾宗明

(福岡県立園芸試験場)

TANAKA, Y. and TAKAO, M.

Studies on the Improvement of the Quality of Cucumber Plants in Vinyl House.

(1) On the Yield Component and the Shape and Quality.

側枝着果型の“白いぼキュウリ”は主枝着果型の“黒いぼキュウリ”に比較すると省力的で生産力が高く、しかも、品質的にも優れているために、西日本地域においても“白いぼキュウリ”の栽培が急速に増大する傾向にある。ところが、“白いぼキュウリ”は栽培環境に対する反応がより敏感であるために、管理が不適切な場合は果形が乱れやすく、このことが“白いぼキュウリ”栽培上の最重要課題である。そこで、'76に育苗時の管理温度と整枝法ならびに本ばにおける設定温度が収量・形質におよぼす影響について検討した。

## 試験方法

試験1：“ときわ光3号P型”，“王金促成”を供試して'76年1月1日には種し，1月8日に昼間気温が25℃で夜間気温を14℃と15.5℃に設定した人工気象室に移し，2月4日に2.2～2.9葉の苗を10㎡当たり18株で定植した。定植後10日間は夜間気温を16℃，その後は12～13℃で管理した。親づるは20節で摘心し，側枝については，2節摘心区と子づるを1節で摘心して孫づる以下の側枝を生育状況に応じて適宜に摘心した区および側枝無摘心区についても検討した。

試験2：“ときわ光3号P型”，“王金促成”を'75年11月1日には種し，接木くん炭養液育苗とし，12月2日にうね幅200cm，10㎡当たり15株植えとした。夜間気温を10～12℃区と12～13℃区を設けた。親づるは床面上160cm，側枝は2節で摘心した。

## 結果および考察

試験1：1) 有効側枝 “ときわ光3号P型”の有効側枝は27～32本で処理区間の差は比較的小さかった。“王金促成”は15.5℃・適宜摘心区のみが特に側枝の発生が少なく，その他の区はいずれも40～45本の有効側枝が発生した。なお，側枝無摘心区は発生した子づるの多くが50～120cmに伸長して過繁茂の状態を呈したので3月末で試験を中断した。

2) 雌花着生 “ときわ光3号P型”は親づる，子づるとともに高い雌花着生率を示し，しかも，1節に2～3の雌花が着生するダブル着果が多く認められた。

3) 収量 総収量と処理法との関係は両品種ともに育苗温度による差より，整枝法による差の方が大きく，“ときわ光3号P型”は適宜摘心区が“王金促成”は2節摘心区が多収を示した。

4) 収量構成 “ときわ光3号P型”の収量は親づると子づるが中心で全体の60～70%，“王金促成”は子づると孫づるが中心で70～80%の数値を示した。

5) 形状・品質 秀品，優品率は“ときは光3号P型”が各区ともに75～80%，“王金促成”は80～85%の値を示した。なお，“ときは光3号P型”は着果数が多すぎ，そのことが秀優品率の低下にかなり影響したと思われる。

試験2：1) 収量 総収量は“王金促成”の12～13℃区が最も多くて10a当たり20t強の数値を示した。また，両品種ともに夜間の気温を高く管理した12～13℃区が10～12℃区に比較して増収を示し，その間に“ときわ光3号P型”は16.3%，“王金促成”は33.7%の大差を認めた。

2) 品位別収量 秀品率は両品種ともに夜間気温を10～12℃で管理した低夜温区が12～13℃区に比較すると高い値を示し，その間に“ときわ光3号P型”は14.9%，“王金促成”では11.1%の差を認めた。

3) 果色 両品種ともに夜間気温10～12℃で管理した低夜温区が終始幾分優れたように観察された。

以上，処理による差よりむしろ品種によって生育反応を大きく異にした。したがって，西日本地域の促成作型で最も生産が安定した“王金促成”について，室内環境要因と増収機構ならびに果実の形状・品質についてさらに検討する。